

「一家の芸」で世に出る時代

かやいぎ

— 石黒政常「秋草に鵲図」小柄 —

伊藤 三平

はじめに

写実的かつ華やかな花鳥図を彫って人気が高い金工流派に石黒政常を総帥とする一門がある。江戸時代の後期になると京都画壇では、ある特定の生物の描写に秀でた、いわゆる「一家の芸」を売りにした画家が出現している。刀装具でも同様な動きが見られ、荒木東明の「粟穂」、藪常代の「亀」が知られており、石黒派は一門全体で「花鳥」を得意としている。

1. 石黒政常の64歳時の作品

この小柄は細かく石目状に加工した四分一地に「鵲に秋草（女郎花、桔梗、薄）」を赤銅、金、銀を使って高彫色絵で彫って据えたものである。ただ残念なことに小柄表面に当たり傷があり、女郎花や桔梗の花には潰れている箇所があり、真価を損ねている。

鵲が女郎花の枝にとまって、枝が一瞬に撓む。この撓みの反動を利用して再度飛び立つのである。動の一瞬を静に転化させて見事である。

裏板全体（写真は銘字部分だけ）には金の薄い板を張り付ける豪華な造りにしている。そこに「文政六癸未夏日 六十二才 寿命政常（花押）」と入念な銘を彫っている。四は死に音が通じるから二とするのは時代の慣行である。ちなみに、政常は宝暦10（一七六〇）年～文政11（一八二八）年の69年の生涯で、還暦時から寿命と号している。

見えない裏板に金板を貼っているのは度々出されている幕府の奢侈禁止令の影響かとも考えたが、特にこの時期の禁令は確認していない。表地が地味で裏地が派手な衣装は江戸人に好まれ、町火消しの装束にも表は籠目模様の木綿地を刺し子にし、襟に火消しの組名を入れた防火仕様だが、裏地に派手な描絵模様を入れ、無事鎮火した晩には裏地を見せて凱旋したと伝わるものが残されている。江戸の風潮とも言える。



（原寸 9.7cm×1.4cm）

2. 鵲について

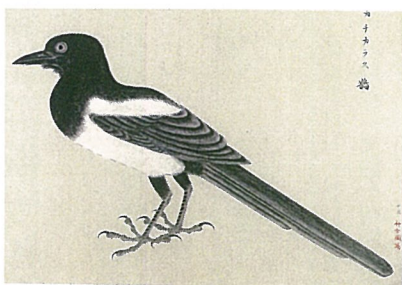
先人の箱書や日本美術刀剣保存協会の証書では「秋草に小禽」になっているが、鵲である。日本では佐賀平野周辺に生息し、天然記念物に指定されており、佐賀県の県鳥である。

鵲は北半球に広く生息しているが、航統距離が短いので、大陸から渡ってきたわけではなく、人為的にもたらされたとの説が有力である。朝鮮出兵時の文禄年間に鍋島直茂の家臣・原十左衛門吉親という人物が直茂の命により、捕まえて本国に放ち、これを勝鳥（カチカチと鳴く）と名付けたとの伝承もある。江戸期を通じて藩では瑞鳥として保護し、『大和本草』（貝原益軒著、一七〇九年刊行）でも「筑紫に多し」と記載されている。（日本産カササギ *Pica pica sericea* の由来・史料調査による）江口和洋・久保浩洋著、山階鳥類研究所研究報告

（写真は『新訂 日本の野鳥550 山野の鳥』五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸の解説・写真より）



前述したように鵲は江戸近辺で見られる鳥ではないが、拙論「刀装具における画題の選定意識の変化―無銘「蜂図」目貫―」（『刀和』四一六号）で触れたように18世紀頃から本草学（博物学）が盛んとなり、大名など高位の人物も自然に関心を寄せて、自ら写生したりして図鑑を上梓するようになる。武士、本草学者、画家の鳥類図鑑も多く出版されている。これらの中で私が鵲の絵を確認したのは画家宋紫石の『唐紅毛渡鳥写生』と常陸笠間藩主牧野貞幹の『鳥類写生図』、尾張藩士水谷豊文の『豊文禽譜』と服部雪斎画・本草学者森立之解説の『華鳥譜』である。実物に似ていない絵もあるが、その中から政常在世中の文化7（一八一〇）年頃に上梓された『豊文禽譜』における鵲図を『江戸の鳥類図譜』大名、学者、本草画家が描いた日本の鳥たち（細川博昭著）より転載する。



石黒政常の彫った鵲は真に迫っており、政常が実見して写生したとも思える。当時の江戸では珍鳥も含めた各種の見世物も盛んであったのである。

3. 画題の意味

この小柄は瑞鳥としていた佐賀藩関係者が注文した可能性もあるが、中国では鵲は吉兆を報じる霊能がある喜鵲とも呼ばれ、鵲を描いた図を報喜図と称して喜ばれていたこともあり、それらの伝来絵画の影響も考えられる（東京国立博物館蔵の「霊鵲報喜図軸」（李珣：18世紀の清の画家）の「文化遺産オンライン」上の説明より）。

この小柄では鵲に秋草が描かれている。中国の伝説に七夕の日に天の川にできる橋を鵲橋と称し、これによって織姫と彦星が出会うことから、良縁に恵まれると言う意があり、それを願って政常に注文した可能性もある。ちなみに旧暦では七月は秋であり、七夕は秋の行事である。秋草と一緒に描かれることに違和感はない。

鵲については、小倉百人一首にも収録されている大伴家持の和歌「かささぎのわたせるはしに置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける」は有名だが、これは冬の歌であり、それを本歌とした寂蓮法師の新古今和歌集所載の「かささぎの雲のかけはし秋暮れて夜半には霜やさえわたるらむ」（鵲が架けるといふ雲の橋は、秋が暮れた夜中には霜が白々と冴えていることであろうか）の意も汲んでいると考えられる。

4. 花鳥図の流行（沈南蘋の影響）

室町時代までは禅宗寺院における絵としての格付けが低かった花鳥図は、桃山時代に他宗派も隆盛し、城郭にも使用されるようになり多く画かれるようになる。江戸時代の初期の花鳥画は武家好みの虎や鷹、吉祥の鶴、鷺、鴛鴦に花木は松竹梅や桐、牡丹などを組み合わせた絵が多かったが、京都では宮廷の絵所預に復帰した土佐派や、京都町衆のニーズにあった花鳥画をデザインも工夫して描いた琳派の作品も生まれた。

享保16（一七三一）年に清の画家、沈南蘋が長崎に来て、二年ほどの滞在期間に画家であり通詞（通訳）だった熊斐（神代甚左衛門）に絵の指導をした。教えたのは熊斐だけだったが、多くの画家が南蘋の作品に影響を受けて学び、南蘋の帰国後も、宋紫岩などが来日して、日本に南蘋風の絵が広まっていった。その魅力は、宮廷画家風の細かく描き込んでリアルに見せる画法と、艶やかな花や色鮮やかな鳥、神々しいまでの毛艶をした量感溢れる動物の姿にあった（南蘋の画風の説明は『与謝蕪村』（府中市美術館編・著より）。

当時の画家はこの画風に刺激を受け、江戸では宋紫石が高名であるが、京都画壇でも伊藤若冲や円山応挙も影響を受けて、写実的な花鳥画が広まり、花鳥の題材も、折からの本草学（博物学）の発展も相俟って、様々な花や鳥などに及んでいる。応挙の門人でもある呉春は、応挙の隙の無い完璧な画に情緒的な画風を加味して人気を博した。呉春の弟子たちは、互いに切磋琢磨しあい、特に岡

本豊彦と松村景文が頭角をあらわし、「花鳥は景文、山水は豊彦」と言われるまでになる。その一派は後に四条派と称されて近代日本画の主流となった。

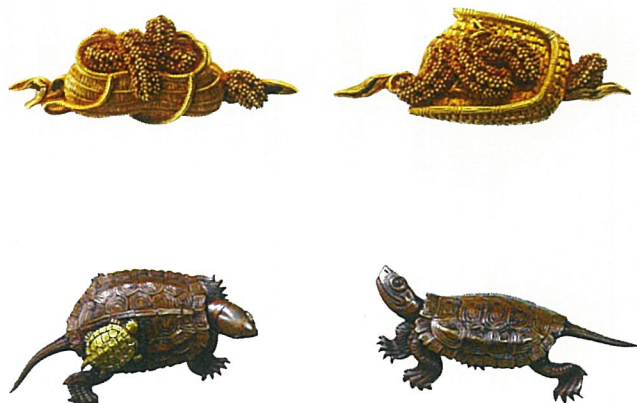
5. 一家の芸

『日本の美術210 江戸絵画Ⅱ（後期）』（小林忠編集）によると、多くの職業画家が登場して競争が激化するようになる18世紀中葉以降の上方の画壇では、作風の個性化とともに、主題の選択においてそれぞれの特色を明確に打ち出すようになってくる。「花鳥は景文、山水は豊彦」もその一例であるが、このような得意の画題を一家の芸と称している。

伊藤若冲の「鶏」は嚆矢だが、次の代には森狙仙の「猿」、岸駒の「虎」の写実が高高く、見事なものが残されている。他に白井直賢の「鼠」、松本泰時の「蝦蟇」という特殊なものまでもが現れている。

この風潮は刀装具においても見られ、京都金工では後藤一乗門下の荒木東明は「栗穂」を彫って他の追随を許さず「栗穂の東明」の異名がある（写真の東明の金無垢目貫は『超絶技巧』の源流刀装具（内藤直子著より）。また迫真の写実作品で名を馳せた一宮長常の門下の藪常代は「亀」の彫りで名高い。

（常代の目貫は『紀州の刀装具』（日本美術刀剣保存協会和歌山県支部編より）



江戸金工の石黒派では総帥の政常が凄みも感じる見事な「鷹」を彫っているが花鳥図も多く、一門の二代政常（政守・盛常）、政明、政美、是常、是美などが、それぞれに鮮やかな花鳥図を彫って人気を博している。

6. 金工の得意の画題は以前からあるが

得意の画題を持つ金工は昔から存在する。後藤家は家祖祐乗以来、「獅子」と「龍」の彫りで名高い。代々の当主が微妙に変化させて、これらを彫っており、それぞれに見所があることは拙論「後藤家の伝統的画題（金無垢獅子）での光栄、

栄乗の作風―時代の影響か、個性か―（「刀和」通卷四一〇号）で述べた。これこそ御家芸と称するものである。武家の礼装の袴指には「家紋」か「龍」「獅子」の刀装具を用いたので、上層武家に後藤家の当該作品は常に需要があったのである。

また町彫の祖と言われる横谷宗珉の獅子の彫りは「横谷獅子」と称され、絶大な人気を博し、その弟子の柳川直政も師譲りの獅子の彫りで「柳川獅子」の名を伝えている。大森英秀は独創的な名工で、蒔絵象嵌と称される技巧でも有名だが、波の彫りも名高く「大森波」と言う言葉が伝わっている。これらの言葉は世間の称賛である。どんな画題でも巧みに彫った岩本昆寛は一時期「魚尽くし」の画題で名を馳せ、この画題は弟子の鈴木良栄に引き継がれている。

江戸時代後期の一家の芸は、作家としての差別化と同時に、購買力を持った幅広い需要家層の誕生が背景にあったのではなからうか。「粟穂」「花鳥」は武には直接関係しない画題である。

美術家でも音楽家でも、自分が好きな画題、曲がある。「好きこそ、ものの上手なれ」の諺があるように、それは得意芸おほし十八番おはしになり、やはり良いものが多い。

ただし、それが世間で持て囃されると、生計面から、その画題に安住しがちとなり、魂の籠もっていない、売り絵との批判を受けることもある。芸術とは難しいものである。